

日本共産党綱領と最近の理論的發展について

二〇〇八・四

はじめに

一、「議会の多数を得ての革命」という道

○「議会の多数を得ての革命」は綱領確定以来の路線

○マルクス、エンゲルスと多数者革命論

○レーニン『国家と革命』の批判的な検討

——「強力革命必然論」と国家機構「粉碎」論

二、世界論——綱領第三章の新しさ

(ア) 世界を四つのグループに分ける

○発達した資本主義国

○社会主義をめざす国々

○アジア・アフリカ・ラテンアメリカの国々

○旧ソ連・東欧の国々

(イ) 世界はなぜこんなに活気づいてきたのか

——ソ連崩壊から一六年

三、資本主義の矛盾を生き生きととらえる

(ア) 資本主義の体制的矛盾をどうとらえるか

○マルクスのとらえ方

・資本主義の「推進的動機」「規定的目的」

・資本にとって最大の矛盾は資本である

○エンゲルスの定式について

(イ) 『資本論』第二部こそが“本舞台”

四、未来社会論

(ア) レーニン以来の「二段階」論の克服

(イ) 生産手段の社会化とは何か

○ 共産主義の運動の目標のスローガンで発展があった。

○ 「結合した生産者」の手に引き渡す

(イ) 「市場経済を通じて社会主義へ」の探究

(ウ) 「自由」の発展という角度からの説明

五、科学的社会主義の世界観を丸ごと研究する

——” マルクスをマルクス自身の歴史の中で読む ”